

随 想

研究開発と寓話

長 島 晋 一*



風邪ひきの話

教育に関する痛烈な諷刺をある新聞紙上で見かけたことがある。それは下記のような主旨のものであつた。

“風邪ひき”が人間の理想の状態だと考える社会があつたと仮定するのである。もちろん、人びとは“風邪ひき”になることを望み、子を持つ親はその子を立派な“風邪ひき”に育てることを願う。そこで“風邪ひかせ”の医者が登場することになる。

医者は世の中の立派な“風邪ひき”と見られる人びとを観察する。そして、それらの人びとには共通して次のような徴候があるのを発見する。第一に熱が高い。37°C以上の熱がある。次に頭痛を訴える。第三に身体のだるさを感じている。

そこで、医者は考える。このような症状をどのようにして実現させたらよいか？そして思案の末に次のような解決策を思いついた、というのである。

まず、37°C以上の高熱は上等のカレー粉と、これも上等のワサビを手に入れて練り合わせ、これを子供の身体中に擦りこむことによつて得られる。次に頭痛であるが、これはわけはない。子供の頭にゲンコツを食らわせるだけのことである。最後の問題は、身体のだるさを感じさせることであるが、それには子供達に鉛のチョッキを着せて、近所の公園を10回ほど走り回らせるとよい。

これで万事オーケーである。熱は38°C以上にも上がり、頭が痛いと言き叫ぶにちがいない。これだけ運動をさせたら、どんな元気な子供も立つてはいられないくらいに身体がだるくなるはずである。そこで医者は大いに満足する。“やつたぞ。私はとうとう“風邪ひかせ”の名医になつた。見てくれ。立派な“風邪ひき”を作つたぞ”，と。

話は以上のようなものであるが、研究開発にたずさわる私どもにとつても耳の痛い話である。われわれが、この医者立場だったら、この成功に気をよくして、“風邪ひき”の次に来るであろうもつと立派な“病氣”はどんなものかを、ひたすら探しまわるであろうか。そのような才覚も自信もなく“風邪ひき”の次の立派な“病氣”はこれだ、と皆が言い出すまでじつと待つているであろうか。

植樹と継木の話

こんどは本当にあつた話である。私どもの研究所の前庭の眺めは四季を通じて楽しい。正門から車寄せに向つて右手に植え込んであるつつじ、正面の研究棟の前に広がっているつつじが咲きそろう頃の美しさは格別であるが、私が最も好きなのは西側の柵に近くに植えられている数本のけやきの大木の姿である。春の新緑、真夏の濃緑の茂みのいずれもさわやかであり、一方真冬の枯葉を落とし切つた葉脈のような枝ぶりも好ましい。ところが、高さ7~8メートルもあるこれらのけやきの樹は、いずれも数本の長い丸太棒でしつかり支えをしてある。研究所の建物ができてからもう15~16年も経っているのでこれらのけやきの樹々が移植されてからもそのくらいの歳月を経ているはずである。不要になった附属品をいつまでつけているつもりか、とからかい半分に掛の者に尋ねてみたら、意外な返事がかえつてきた。

* 本会理事 新日本製鉄(株)基礎研究所所長

ある程度大きな樹を移植すると、自分自身を支えられるほど十分に根を張るには5年や8年では足りない。ふだんは何事もなく立っただけでも、強い風にあうと風圧に耐え切れずひっくり返ってしまうことがよくある。立派に見えるだけに、支えは目障りだけれど、そんな事情なので申しわけないが、もう少しばらくこのままにさせておいてほしい、ということであった。

これとは反対に、自力で悠々とそびえ立つ桜の木の話もある。先日テレビのニュース番組を見ていたら、岩手県盛岡市の地方裁判所の庭に石割桜と呼ばれる桜の大木のことを紹介していた。幹の太さ23メートル、300年の樹齢をかぞえる古いものであるが、この大は花崗岩の一枚岩をまつ二つに割って、その間に入りこみ遅しく根を張って育っている、という。岩の割れ目を通って根が入りこんだのか、根の力で岩を割り裂きながら成長したのかははつきりしないが、まぎれもなく岩の割れ目に自分のみの力で育ち、繁つて年々春がくると豊かに花を咲かせるのだということである。

戦後わが国では海外から新しい技術を導入し、それらを見ごとに消化して、世界に誇る技術にまで育て上げてきた。これらの我が国で開花した技術の中で、今後のきびしい世界経済の風雪に耐えて、生き残つてゆくだけの深い広い根をおろしたものがどの位あるのだろうか。石割桜のように今後も遅しく育つてほしいものである。

また、継木の話聞いたことがある。わが家の狭い庭に植えたおぼえもない柿の若木が芽を出した。もう30cmにも育っている。桃、栗3年柿8年というから、急には実もならないだろうが、その中にはと楽しみにしていたら、笑われた。桃でも柿でもりんごでも、実生の木は育つただけでは立派な実はない。元木が十分に育つたところで良い実をつける名木の枝を継木するものなのだそうである。

樹勢のよい元木を育てることと、立派な実をつける素姓のよい枝を選ぶことが、良い果実を得る秘訣であるという話も、研究開発と結びつけてみると一脈相通じるものがあるように思われる。

以上何となく記憶に残っている挿話を並べてみた。なまじ、研究開発と関連づけて月並みな結論を出すよりも、読者自身に筋書をつくり肉づけをして面白い話がまとまったら聞かせて頂きたいと思つている。